学道一如

発行
小樽双葉高校
生徒会通信
2025年6月17日
第15号

バレー部高体連全道でベスト32

バレー部は高体連全道大会で北見柏陽に2−1で勝利して予選を突破し、決勝Tで天塩に0−2で敗れ、全道ベスト32となった。

バレー部員、前列から３年生、２年生、１年生。高体連前の私立８校のリーグ戦では北海高校と旭川龍谷に勝利し、東海大学札幌校と北海道栄に敗退、８校中６位だった。

北見柏陽は新人戦でベスト８入りしている実力校だが、２−１で勝利した。「サイドアウト、トータルディフェンスなど練習してきたことを意識してプレーできた。雰囲気も良かった」と主将の丸山璃恋さん。

天塩戦は朝一番の試合で自分たちのプレーができずに終わってしまったという。

「目標は全道ベスト４入り。基礎から全般を再確認し、メンタルも強化したい」という。８月上旬の私立校リーグ戦、11月の選手権に向けて、仕切り直す。

戦後80年 未来への伝言

双葉歴史探偵事務所
□6□

特攻隊とは何だったのか
牧野顕吉さんの資料から考える

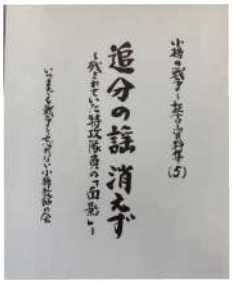
鴫谷節夫さん（元高校教諭）から『小樽の戦争〜証言・資料集（５）追分の謡消えず〜残されていた特攻隊員の「面影」〜』（いつまでも戦争を忘れない小樽教師の会）を手渡された。特攻隊員は終戦を境に軍神から戦犯になる恐れがあり、遺族は資料を処分せざるを得なかったという。特攻隊とは何だったか、個人の苦悩はいかほどだったかを考えたい。

【写真】毎年、終戦の日に行われている小樽商大での慰霊祭。学徒出陣などで戦死した３４７名の学生や教員の名前が刻まれた緑丘戦没者記念塔の前で祈りを献げている。その中に特攻隊員７名がおり、その１人が牧野顕吉さんだった。

「両君の戦死が新たなる意味に於いて世の中に現れる日の来ることを信じます。」（追悼文集序文より）

小樽商大の前身である小樽高商に昭和15年250名の新入生が入学した。その中に牧野顕吉さん（富山県魚津中学出身）がいた。後に特攻隊員としてフィリピンで戦死された方だ。

小樽商大の「緑丘会」は牧野さんの戦死の報を受け、追悼集「神鷲牧野大尉の面影」を発行予定だった。だが、敗戦のため出版不可能となり、集まっていた原稿を清書し布張りの表紙を付けて製本して、遺族に贈ったという。同期の中島泰明さんが遺族を訪問したときにこれを手にした。そこで遺族の了解を得て、鴫谷節夫さんにこの資料を渡し、一九八八年に証言・資料集（上写真）が発行された。



【中島泰明さんの回想文より】

テニス全国大会で準優勝

…牧野は一年間の寮生活を続けた。庭球部員として長い白いズボンをはいて寮の横にあるコートでラケットを振っていた彼、秋の夜上級生を囲んでの文学同好会で富山弁で論じていた彼、ひそかに函館出身の先輩から江差追分を習っていたことは、あとで知った。何事にもひたむきな男であった。三年生になって北大予科とのテニス大会や東北北海道のインターカレッジで優

特攻　太平洋戦争末期に日本軍が行った、航空機や魚雷などに人員を乗せたまま敵艦に体当たりさせる攻撃。陸海軍合わせて約６千人が亡くなったとされる。

【データ】特攻隊慰霊顕影会（1990年、ｐ131−312）より

・航空特攻	・海軍航空特攻隊員	2531人	
	・陸軍航空特攻隊員	1417人	計3948人
・海中特攻	・回天特攻隊員	106人	
	・特殊潜航艇	440人	計 546人
・海上特攻	・震洋特攻隊員	1081人	
	・海上挺進戦隊員（ﾏﾙﾚ）	263人	計1344人　総計5838人

※西日本新聞は総計6371人と推計、発表している。

勝し、田園調布での高専全国大会では準優勝に輝いた。

特高が学生を監視

しかし、時局は次第に緊張の度を高め、街の人々は我々に対して優しく寛容であったが、特高が登校中の寮の部屋に入り込んで本箱を調べたり、公園通りの喫茶店「カール」や花園通りの「西村」等に出入りする学生達にも警察の厳しい目が注がれるようになった。暗い時代に入っていった。

繰り上げ卒業、入隊

そして遂に十二月八日の開戦の日を迎えた。その日の一時間目の授業中、教室からマッキンノン教師が拘引され学内は騒然となった。先生には日本人の妻と金沢旧制第四高等学校在学中の長男があった。既に三年生は十二月一日に繰り上げ卒業をしてその多くは入隊をし、私達も六ヶ月の学業短縮の措置がとられて十七年十月には軍務に服することになった。牧野も郷里の部隊に入隊したが、それ以来、二度と逢うことがなかった。私の脳裏には時間が止まったままの彼の若い顔が残っている。

三十五年後、ニュースの中に

それから三十五年後の昭和五十二年、毎日新聞社から発行された「日本ニュース映画史」の中にあった護国隊員として出撃する牧野の一駒が、目に止まった。思いがけない事に暫く絶句したのであったが、そのフィルムを借用したいと願ったところ、「日本テレビ」が企画している「特攻隊鎮魂の記録」の番組の中で、「故国を離れる時にラジオ放送を通じて江差追分を唄って両親や兄弟に別れを告げた牧野」を採り上げたいので協力してほしいとの連絡を受けた。

追悼番組に全国から反響

録画の日、十数人の札幌在住の級友が固唾を飲んで見守る中で、ニュース映画が三回繰り返し上映された。整列した十二名の護国隊員の中の彼が最後の別盃に酒を受ける時、二、三度まばたきをし、口もとを一寸ゆがめた。そして視線を一点に据え死を決した風貌は、われわれの胸を激しく揺さぶった。次いで彼への追悼談や、母校の戦没者記念塔の前で彼の得意とした江差追分を合唱し、石垣島の沖合で機上から私が花束を捧げるシーンが録画され、丁度彼の三十三回忌に当たる五十二年八月十四日に全国放映された。

放送後全国の多くの方々から、当時のラジオ放送を思い出したという手紙が届いたのであるが、中には当時女学生だった広木笙子さんという方がその日の日記帳にこう書きましたと、その印象を添えた手紙も受け取った。戦況が日に日に悪化していった当時、その放送が、多くの銃後の国民に感銘を与えていた事を知った。

十年かけ軍歴を調べる

私は、世俗にまみれることなく死んだ彼の二十二才の人生の中での、特に軍歴の空白部分を埋めてやりたいと思い始めたのは、その頃であった。操縦訓練を受けた大刀洗陸軍飛行学校菊池教育隊の生き残りの方々や、教官、隊長の方とも漸く連絡がとれてまとめたものが、別添えの「牧野顕吉君の航跡」である。思い立ってから十年の歳月が過ぎた。

『陸軍特別攻撃隊』から

菊池教育隊で訓練を受け、更に比島での実戦訓練を終えた彼は、帝都を防衛する第十飛行師団に配属された事が判明した。その後、特攻要員としてレイテ作戦において散華する迄については、高木俊朗著「陸軍特別攻撃隊」（写真下）に詳しい。

【要約】昭和十九年十一月六日、第十飛行師団において特別攻撃隊『第４八紘隊』が結成され、彼はその一員となった。隊長は陸士出身の遠藤栄中尉、以下十二名であった。十一月十三日には比島への進出命令が下り、天王山の決戦といわれたレイテ島に向かうことになる。…機体整備などに時間を要し、比島のクラーク基地に進出したのは十二月二日のことだった。

その五日後の十二月七日、レイテ島に押し寄せる米艦船群に対して特別攻撃命令が下された。当日午前六時、比島第四航空軍司令官富永中将は『護国隊』と命名、護国隊は七機編隊で、同基地を飛び立った。（ニュース映画）だが雲が低く目標把握が困難を極めたので、とりつけてある二五〇キロ爆弾二発を着陸の際、脚を折る危険を避けるため海中に投下し、いったんマニラ郊外のマリキナ基地に引き返した。同日午後一時、再度の出撃命令を受けた護国隊は、午後三時三十分レイテ島オルモック湾の米輸送船団に突入した。」

援護の有川中尉の証言

その最後は、援護にあたった有川覚治氏によって見届けられた。

「レイテ島の海岸に沿って南下して行きますと、オルモック湾に四～五千トン級の輸送船とその沖合に駆逐艦が浮かんでいました。愈々機動部隊に近づいたなと感じ南下してゆきますと、護国隊が単縦陣の隊形になって私の飛行機の右横を一機ずつ翼を振りながら、中には手を振りながら通り過ぎて前方に出て行きました。そうして敵輸送船三隻に向かって緩降下して行きました。私の編隊は夢中になって続いて行きました。攻撃決行かと思いました。敵輸送船の上、高度千米で上昇に移りましたので一瞬ああ攻撃でなくてよかったなあとほっとしましたが、高度三千米程に上がりますと大きく右旋回して横広の隊形になったと見たとたんに、角度三十度位で敵輸送船三隻に向かって突進して行きました。隊長機を中心に一線になっていました。敵輸送船の舷側から茶色の服を着た敵兵がバラバラと沢山海に向かって飛び込むのが、目に映りました。実際は何十秒という短い時間であったのですが、実に長い時間がかかったような感じが今でもいたしますが、長い降下の後、黒い機体がスーッと三隻の敵輸送船に吸い込まれて行きました。一隻は煙突の付近で真紅の大きな光が発し、すぐ真黒い煙がもくもくと立ち昇り、船は左方に傾きながらゆるやかに旋回しはじめ、みるみるうちに黒煙に包まれて見えなくなりました。一隻には前部の甲板に一機、後部甲板に一機。一隻には中央部の舷側と後部甲板に命中し、しばらくたって二隻とも煙が出てきました。一機は船の僅か前方に、一機は僅か手前の海中に真っ白い大きな水しぶきを上げて吸い込まれて行きました。その状況を確認するや私はすぐ上昇に移り高度三千米で敵輸送船の上空を大きく旋回しな

「郷土の神鷲牧野顕吉少尉最後の勇姿」（日本ニュースより）

四十年振りの再会　嶋倉睦子さん（エッセイ）

…その間も戦局は加速度的に敗戦へと転がり始めていった。そして昭和19年、あの痛恨極まりない神風特攻隊の出撃という事態になったのであった。…そんな或る日の勤務明けに自宅でラジオのスイッチを入れた。偶然にもそれは神風特別攻撃隊出撃前夜の生放送であり、明朝の出撃を前に各隊員が辞世の言葉や隠し芸を披露するというものであった。私は背筋を電流のように走る感動で思わず居ずまいをただしてラジオの前に座った。次々と若い隊員達が詩吟や唄を披露していった。と、突然、M少尉という名前が耳に飛び込んできた。私はその瞬間全身からさっと血が引いていくのを感じた。しかし、M少尉は澄んだ声で淡々と江差追分を歌い始めていた。

スキーを続けたいため女学校の補修科に残っていた登校の毎朝、花園公園の入口で必ずゆき違う高商生がいた。ボロボロの帽子からは頭髪がはみ出し、煮染めたような手拭いを腰にぶら下げ、テニスのラケットを抱えていた。それがMさんだった。お互い小さな町の学校の運動部員であり、何となく意識し合っていたように思う。しかしすれ違うとき、ちらりと視線を投げ合うだけで一言も言葉を交わすこともなく、翌年私は卒業しMさんのことは忘れるともなくわすれていたのである。そのMさんがいま、敵艦目がけて体当たりの出撃をしようとしているのだ。天皇陛下の御為、本土防衛のために自らの命を断とうとしている彼の胸中にいま何が去来しているのだろうか。無心に歌い続けるMさんの歌声に後から後から突き上げてくる嗚咽を抑えることができなかった。…

がら敵船の最後を見届けようとしました。一時間近く回っていましたが、一隻は黒く海面に広がった煙の中にあって全く姿が見えず、他の二隻は高く黒煙を上げながらぐるぐる海面をのたうち回っていました。

突入の時間は午後三時三十分でした。敵機は一機も見えませんでした。太陽は西の方へ傾いていました。海面は波一つなく鏡にようでした。」

こうして牧野は南海の果に散華した。紅顔二十二才。

江差追分を唄って出撃

長兄が弟の胸中を察する

木内宏氏著「賽の河原紀行」の中で、長兄の政雄氏が次のように語っている。

――私の弟の顕吉は昭和十九年十二月七日、レイテ島付近で陸軍特別攻撃隊護国隊の一員として戦死しました。出撃の際、見送りの人たちに別れを告げるべく江差追分を朗々と唄ったとあとで知らされました。

「けぶる渚に陽はたそがれて　沖に江差の灯がともる」

と唄ったそうです。あなたさまは追分は鎮魂歌だとお書きになりましたが、弟は自らの生をあの歌で締めくくったのです。大本営発表では輸送船二隻、上陸用舟艇六隻以上を撃沈したと報道されました。少尉ですが旧制高商を出て予備仕官学校に入学し、陸軍飛行学校へと進んだ学徒でした。

なぜ特攻に志願したのか

戦局の渦に巻き込まれた

学友の多くは主計畑に配属されたのに、なぜ弟が特攻を志願したのか、私には今もってその理由が判明しません。いいえ、弟顕吉は決して志願したのではなかったろうと思うのです。気持ちのやさしい、どちらかといえば文学青年のような子でした。しかし豊橋の予備仕官学校にいる間に、戦局は日に日にきびしくなっていましたので、この劣勢を挽回するのは航空機の力だけが頼りだというふうな機運が強まり、弟もその渦の中に巻き込まれていったのだと思います。弟を高商に進学させたのは母でした。末息子だけは戦地に行ってもらいたくない、死なせたくないと口癖のように言っていた母は、たとえ戦地に赴いても高商出なら主計将校になれよう、そうしたら幾らかでも危険が少なかろうと考えていたようです。当時小学校の教員をしていた長男の私にそう打ち明けたとき、母は「お前は学校で忠義だの何だのと教えているじゃろが、人間、死んでしもたらどうなるか」と激しい気迫で言いました。戦争へ戦争へと傾いていった昭和十四、五年のころ、こうまではっきり自分の意志を言い切れた母を、私は今でも尊敬しています。弟はこの母の気持ちは敏感に感じとっていたはずですから、なおさら特攻になった理由がわからないのです。〈中略〉

苦悩の中自らを鼓舞した日記

それにしても戦争というのは恐ろしいものだと思います。弟の残した日記を見ると、日を追って自らを鼓舞し、死を美化しようとする気持ちを一歩一歩作っていった跡が、はっきり判ります。本気でそう考えなければ、寂しく、辛く、とてもあの状況を生きてゆけなかったでしょうからね。しかし、毎日が迷い、絶望の中の強がりだったのでしょう。――

牧野家を訪ね、追悼文集発見

航跡調査も一段落した昭和六十一年十二月七日、彼の四十三回忌の命日に当たる日に、初めて黒部市の牧野家を訪れた。その日は朝から氷雨が降って、親不知付近は日本海の怒濤が白く岩に砕けていた。

兄正雄氏から色々と生前のことを伺い、飛行学校時代の古びた日記帳や写真等を見せて頂いたが、残された遺品は数少なく、厳しかった当時を偲ばせた。戦後、役場からは「特攻に関する資料や遺品はすべて牧野家の責任で処分するように」と強い指示を受けたが、遺族はこれらを二階の屋根裏に隠し必死の思いで守ってきたという。

この中に同窓会の手によってまとめられた追悼文集「神鷲牧野大尉の面影」があった。

軍指導者の責任を問う

用兵の原理に反し、邪道極まりない特攻という手段を選んだ総帥部に対する怒りはいうまでもないが、「この美しい山河と愛しい親兄弟を守る」ために己の命を捨てた犠牲心に対しては何人も心うたれずにはいられないであろう。

（昭和六十三年十二月一日　中島泰明氏）

※中島氏は厚岸郡浜中町生まれ。小樽高商を出て、旭川歩兵連隊へ入隊。シベリア抑留を経て、昭和二十四年帰国。国税庁に勤務した。

特攻隊の苦悩を掘り起こす
―戦争を美化させない―

山元研二氏（北海道教育大学釧路校教授）は北海道新聞（2025年6月4日）で次のように述べている。「特攻は戦意高揚のための作戦だったと私は思います。1944年（昭和19年）～45年の資料を読むと、旧日本軍は国民の厭戦気分の高まりを恐れていました。特攻で敵の艦船を何隻沈めるかというのはたぶん大きな問題ではなく、国のために若者が命をささげるという「殉国美談」が欲しかったのでしょう。戦没者たちの尊い犠牲の上に今の日本の平和がある、という言い方にも注意が必要です。犠牲を強いた責任が覆い隠されてしまうからです。特攻を命じた指導者たちは、戦中の軍法会議でも戦後の裁判でも裁かれていません。非人道的な作戦の法的責任、道義的責任が深く追及されることはありませんでした。」

山元氏は生き残った元特攻隊員への聞き取りを重ね、苦悩や葛藤を掘り起こし、記録してきたという。「死んだ隊員を英霊扱いするのは戦争責任のごまかしだ」と言う人がいたそうだ。

教科書の記述は歴史を動かした為政者の判断に焦点を当てる。しかし、そうした視点だけでは戦争の本質を捉えられない。戦後80年の節目に、事実をきっちりと掘り起こして、記録や証言のバトンをつなぐ重みを、私たち一人一人が考える必要がある。（編集部）

牧野顕吉氏の日記より

（大刀洗陸軍飛行学校にて）

二月十一日　金曜日　晴

吾人等操縦道は死なり。換言すれば教育の目的は死を教うるものにして、生を教うるものに非ず。その道たる難きも良心に恥ずることなく、心安らかに進むは吾人の辿るべき唯一の道なり。而して死に処するや難く、道たるや越え難し。操縦道の死に処するは吾人等唯一の進路ならん。